

■スタッフ■

監督	寺山修司
台本	寺山修司
〃	岸田理生
映像	鈴木達夫
音楽	J・A・シーザー
美術	池谷仙克
装画	合田佐和子
照明	海野義雄
録音	木村勝英
編集	山地早智子
美粧	川邊サチ子
〃	相良智子
助監督	榎戸耕史
衣裳	山田勇男
記録	森崎偏陸
効果	藤田信夫
〃	深谷浩生
道具考案	小竹信節
監督補佐	田中未知
製作主任	天野勝正
監督助手	根本豊
〃	平山秀幸
〃	浅井隆
〃	増田信示
撮影助手	伊藤昭裕
〃	柴崎幸三
〃	小野寺眞
照明助手	千葉靖夫
〃	安部力
〃	中島清五郎
録音助手	高木勝義
〃	松本修
〃	山田均
ネガ編集	南とめ
編集助手	高島健一
〃	阿部浩英
美術助手	山口修
〃	萩原卓児
〃	澤路和範
〃	藤本新吾
〃	藤倉俊之
装画助手	大島凜
〃	大西信之
装画助手	横山宏一
〃	種田康幸
録音協力	沼田和夫
美術協力	今村大介
〃	野原弥宵
〃	平良昌才
〃	酒井泰宏
衣裳制作	ユニオン衣裳
衣裳進行	鈴木繁雄
〃	黒沢絹恵
〃	中村洋一
スチール	小竹信節
題字	山崎努
視覚効果	デン・フィルム・エフェクト
方言指導	岡部耕大
制作進行	長田忠彦
〃	岩崎康司
〃	今川祐之
制作事務	小沢洋子
〃	仁茂田弘美
音楽コーディネーター	田村進一朗
音楽演奏	山口恭範
〃	佐藤紀雄
〃	平岩嘉信
〃	上田享
〃	大石三郎
音楽制作	テレビ朝日ミュージック
サントラ盤	SMSレコード
挿入歌	「古いキネマの港町」「ゆびさすところは隣り町」 ポリドールレコード
企画	多賀祥介
製作	砂岡不二夫
〃	九條今日子
〃	佐々木史朗

■制作協力■

沖縄ジァン・ジァン	日本航空
長瀬産業	東洋現像所
アオイスタジオ	アバコスタジオ
三和映材社	パナビジョン
エイトビジョン	東洋照明
(株)ジャパレン	琉球海運K.K
琉球自動車	玉城ロケサービス

(カラー/ビスタビジョンサイズ/2時間7分)

6月1日(土)～14日(金)

ロードショー

前売券発売中

一般 ￥1,000(当日 ￥1,200)

学生 ￥800(当日 ￥1,000)

時間表	日曜のみ(0：15)	2：30	4：45	7：00



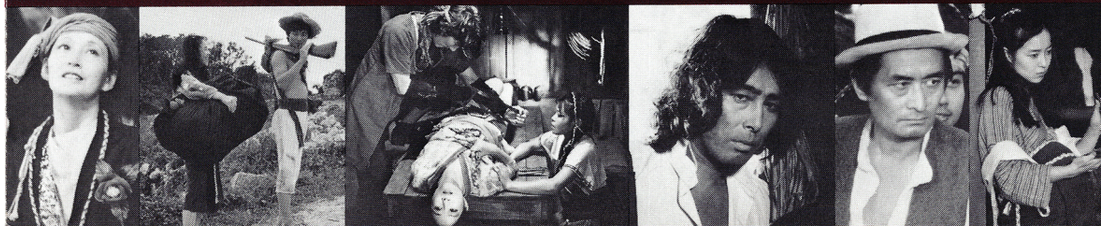
OGIMACHI MUSEUM SQUARE

atg

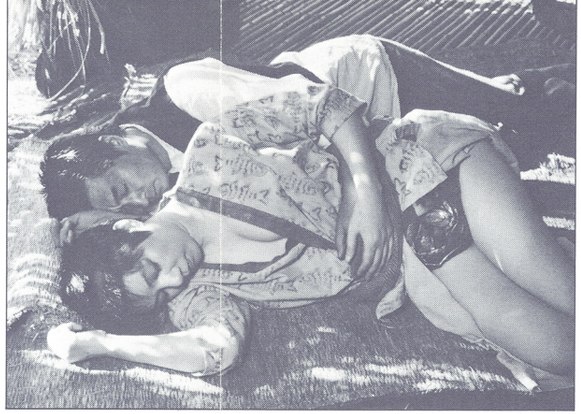
ジァン・ジァン 15

寺山修司監督作品

さらば箱舟



修ちゃんは死んでいない。いつものように、どこか外国で仕事をしていてヒョッコリ帰ってくると思います。いままで私は、公式の場で修ちゃんがいなくなったことを思い知らされるのがいやで避けてきましたが、これも修ちゃんの演出だと思えば抵抗はなくなりました。（故寺山修司氏母堂）





■寺山修司の遺作

寺山修司。演劇実験室「天井桟敷」を主宰。演劇をはじめ、映画、詩、小説、評論、短歌など、ジャンルを超えた表現芸術のすべてにわたり、既成概念を突き破る実験精神に貫かれた〝挑発行為〟に生涯を燃やし続けた。彼の多彩な才能と精力的な創造活動の軌跡を辿る時、その追求の鋭さは、まぎれもなく衝撃的な〝事件〟として、知の様々な領域に継承され続けている。その寺山の、文字どおりの遺作となったのが『さらば箱舟』である。

寺山は、この作品を死の1年前に撮り終えている。その時、すでに病魔にとりつかれていた彼は、この間、2度にわたって撮影を中止せざるを得ない事態を経ているが、入院の要請を断わっての撮影強行だった。いつの場合でも全身全霊をもって創造的営為を成就し続けてきた寺山であったが、特にこの作品の製作にあたっては、その超人的な意志と行動力を凝結させた〝生命の燃焼〟がみられた。〝退屈は悪徳だ〟という本人の言葉どおり、まさしく一時も休むことなく、彼は走り続けたのだ。

■最高のスタッフ・キャスト

『さらば箱舟』は、1980年に企画された。その2年後の1982年1月16日、沖縄での撮影を開始した。〝日本で唯一、伝統と近代の葛藤が生々しく生きている〟というのが沖縄の地を選択した理由であった。約2ヵ月後の3月10日現地ロケを終了。この間のべ350人に及ぶスタッフ、キャストの動員が行なわれている。映像は、カメラの詩人・鈴木達夫、美術監督は池谷仙克が務めた。音楽は『田園に死す』『草迷宮』のJ・A・シーザー、装画に『上海異人娼館』の合田佐和子が参加。機械工作に天井桟敷の小竹信節が配され、卓越したスタッフ陣が、幻想とエロチシズムあふれる〝ファンタジー〟の世界を創出している。

主演の山崎努は、早くからこの作品に興味を示し、彼が演じた捨吉は、台本から山崎を想定して書かれた。その妻・スエ役には小川真由美。共に寺山作品は、これが初めての出演である。他に原田芳雄、高橋洋子、石橋蓮司。そして、新高けい子、高橋ひとみ、天本英世、蘭妖子らの常連が加わり、豪華多彩な顔ぶれがそろっている。

■一族の歴史を通して〝近代〟を描く一大叙事詩

物語は、架空の小さな村を舞台にくり広げられる。

分家の捨吉とスエは、いとこ同士で結婚した。村には、そうした血統の二人がまじわると豚の尻尾の生えた子供が生まれるので、結婚を禁じるというタブーがあった。それを犯そうとする娘のことを案じたスエの父は、彼女に貞操帯をつけ性生活を持つことができぬようにしてしまう。何とかしてそれを外そうと焦る捨吉とスエ。だが、どうやっても貞操帯は外れない。

夫婦生活が持てぬことから、村では捨吉が不能だという噂が広まる。祭りの日、総本家の主人である大作にそのことを嘲け笑われた捨吉は、カッとして出刃包丁で大作を刺し殺してしまう。

捨吉は、スエを連れて村を逃げ出す。しかし、一晩中さまよい歩いてようやく見つけた空家に泊まった翌朝、二人はそこが同じ我が家であったことに気づき、迷宮を一巡りして戻ってきたことを知る。

やがて捨吉は大作の亡霊を見るようになる。そして、徐々に彼は、物の名前を忘れてゆく。狂気が兆してきたのだ。

一方、主人が不在となった本家の威信は、しだいに揺らぎ始める。それと時期を同じくして、村には急激な文明の波が入り込んで来る。

ある者は死に、ある者は〝隣り村〟に新しい夢を求めて去っていった。村はしだいに衰えてゆく。消滅する運命に向かって村は疾走し始めたのだ。

そして、100年後—。

■〝寺山修司〟の集大成

約一世紀にわたる一家の興亡を描くこの一大叙事詩は、まちがいなく寺山修司の集大成として位置づけされよう。しかもそのスケールの大きさ、骨格の太さ、内容の緻密さなどは、最近の日本映画の中でも群を抜く。また、彼独自の幻想的、呪術的映画詩としての完成度は、寺山美学の一頂点を極めた感がある。

時空が相互に飛翔し合う物語は、支配者と被支配者、共同体と外部社会、未開と文明といった様々な対立と葛藤がからんで進行する。100年という縦の時間を横に凝縮し、文明を半ば拒否しながら半ばそれを期待してふつかり合う人々の心理。自由と引き換えに失なってゆくもの、それを取り戻すための模索…神話的世界が解体してゆく過程を描くことで、逆にそれらを浮かび上がらせてゆく。

そして、底に流れているのは、寺山がその創造活動において、常に問い続けた〝自我〟へのこだわりであろう。人間の存在の根源に迫ろうとする一貫した彼の姿勢は、研ぎ澄まされた刃にも似た痛みを我々に与えるのと同時に、人に対する永遠に変わることのないやさしく繊細な視線を感じさせるのである。『さらば箱舟』のラストシーンに象徴されるように寺山独特のとぼけたユーモアにカモフラージュされた人間描写のあたたかさは、観る者の胸に迫るものがある。そして、それは、甘く切ない哀しみをともなって、我々の心の襞に一滴一滴深く泌みわたってゆくのである。



《寺山修司フィルモグラフィー》

1935年12月10日、青森県弘前に生まれる。

1959年『猫学—キャットロジー』（16㎜）
1962年『檻』（16㎜）
1971年『書を捨てよ町へ出よう』（35㎜）
　サンレモ国際映画祭グランプリ受賞
『トマトケチャップ皇帝』（16㎜）
　ツーロン映画祭審査員特別賞受賞
　カンヌ映画祭監督週間招待
『ジャンケン戦争』（16㎜）
1974年『田園に死す』（35㎜）
　芸術選奨新人賞受賞
　ベルギー映画祭審査員特別賞受賞
　パース映画祭審査員特別賞受賞
　ベナルマデナ映画祭審査員特別賞受賞
『ローラ』（16㎜）
　ベナルマデナ映画祭特別賞受賞
　ベルリン映画祭特別上映
『蝶服記』（16㎜）
　カンヌ映画祭監督週間招待
『青少年のための映画入門』（16㎜）
1975年『疱瘡譚』（16㎜）
　ベナルマデナ映画祭特別賞受賞
　ベルリン映画祭特別上映
『審判』（16㎜）
　ベナルマデナ映画祭特別賞受賞
　ベルリン映画祭特別上映
『迷宮譚』（16㎜）
　オーバーハウゼン実験映画祭銀賞受賞
　カンヌ映画祭監督週間招待
1977年『消しゴム』（16㎜）
『マルドロールの歌』（16㎜）
　リール映画祭国際批評家賞受賞
『一寸法師を記述する試み』（16㎜）
『ボクサー』（35㎜）
『二頭女—影の映画』（16㎜）
　ベナルマデナ映画祭特別賞受賞
　ベルリン映画祭特別上映
『書見機』（16㎜）
1979年『草迷宮』（35㎜）
1980年『上海異人娼館—チャイナ・ドール』（35㎜）
1982年『さらば箱舟』（35㎜）
1983年5月4日午後0時5分、死去。

（※作品は製作年を表わす）



■キャスト■

時任スエ……小川真由美
時任大作……原田芳雄
ツバナ……新高けい子
テマリ……高橋洋子
チグサ……高橋ひとみ

時任米太郎……石橋蓮司
ダイ……若松武
鋳掛屋……天本英世
時任ハナ……蘭妖子

書生の林……根本豊
作男ズンム……福士恵二
鍛冶屋の六……牧野公昭
その妻ミツ……矢口桃
蠟燭屋の茂吉……榎木兵衛
その妻グミ……末次章子
時任トメ……加藤土代子

下男アダ……三上博史
下女咲……大林真由美

馬喰の半……サルバドールタリ
巡査吉村……日野利彦
旅芸人の歌姫……蛭沢美季子
旅芸人の呼込男……西郷孝昭
旅芸人の二枚目……高田恵篤
旅芸人の火吹き男……浅井隆
旅芸人の髭女……進藤三千代
旅芸人の刺青男……金田明男
旅芸人の少女……美加里
旅芸人の座長……ギリヤーク・尼ヶ崎
女給のホタル……太田律子
後家のフサ……川尻育
闘鶏場の喧嘩師……青山均
白痴女のスマ……刀禰朱実
神父……水岡彰宏
郵便配達の麦……藤本新吾
葬儀の客……平良進
葬儀の客……平良とみ
酒場の主人……上地昇
半の母親モヨ……嘉数芳子
柱時計の少女……中山りん子
老女ケノ……伊佐カマ

少年時代の大作……斉藤優一
少年時代のダイ……大山レオナ

弁護士の木村……江幡高志
犬憑きの修験者……小松方正
老人……宮口精二

時任捨吉……山崎努

特別出演

視学官……齋藤正治
電気工事夫……松田政男
絵馬の踊り手男……田村哲郎
絵馬の踊り手女……古川あんず
闘鶏場の囃子手……コンディション・グリーン

劇団ひまわり＋人力飛行機舎＋
日本アート・シアター・ギルド提携作品

TERAYAMA